

## 第2章 リスク社会の生活設計

### ーリスクを乗り越え、将来を見つめる手段としての生活設計

大東文化大学非常勤講師  
藤田 由紀子

#### 【要 約】

生活設計は、生活技術である。その時々々の生活環境のなかで、家計や家族の‘現在’の生活を見据え、‘将来’の生活を展望し、個人や家族の夢や生活課題、家族の病気や死亡、災害や失業などの生活リスクを点検し、お金や人間関係、健康などの生活資源を蓄えていく。何よりも、日々の生活と将来の生活とを結びつけていくための考え方の枠組みといえる。

昨今の雇用流動化は、家計に複数回の収入リスクを経験させる可能性をもたらし、リスクマネジメントの必要性を高めている。リスクのダメージからの回復には、①生活課題への影響を少なくして当面の生活を確保する、そして②生活保障資源を再構築する、という二段階の回復が必要である。そのなかでは、家族や友人、情報や交渉力といったお金以外の、そしてライフデザインにも有用である生活資源も重要な役割を果たす。また、その回復を阻む要因としては、借入や貯蓄の取り崩し、保険の解約が少なからぬ影響を与えるものとしてあげられる。

しかしリスクマネジメントは、家計のリスクへの耐性を高め、ライフデザインの実現を助けるものでもあり、むしろそのための思考のツールといってよい。改めて、リスク社会における生活設計の3つの領域ーライフデザインマネジメント、生活資源マネジメント、リスクマネジメント、そして生活設計の基本的な考え方として主体性や時間軸などの要素を確認した。

#### I. はじめに：生活設計とは

生活設計は、生活技術に属するものである。その時々々の生活環境のなかで、それらを踏まえながら、個々の個人や家族の夢や生活課題、家計や家族の状況などの‘現在’の生活を見据え、‘将来’の生活を展望し、お金や人間関係、健康などの生活資源、家族の病気や死亡、災害や失業などの生活リスクを点検する。そして、何よりも、日々の生活と将来の生活とを結びつけていくということの意義が大きい。むしろそのための考え方の枠組みといってもよいかもしれない。

自分や家族の夢を描き、あるいは模索しながら生活課題を見通して、それらを実現したり、延期したり、見直したり、時にはあきらめたりしながら、そして、家族や自分の病気やけが、事故や災害などの様々な生活リスクを意識し、生活の破たんを防ぎながら、家族や友人、お金や自分の知識、能力などの生活資源の長期的なバランスをとっていく。日々変わる生活のなかでそれらを取りまく状況は変わっていく。時には迷いながら‘過去’を振り返り、自分や家族の価値観や目指してきたものを探してみることもあるかもしれない。あまりの環境の変化に、あるいは予測や希望と違う出来事に遭遇して、自分の生活課題や夢を見失うこともあるかもしれない。それらを考えたくないこともあるかもしれない。

それでも、乗本が‘姿勢’といったように、生活設計は、それを考える主体が、どのような生活を送りたいかという意思や想いを明らかにし、漠然とでも見出していく作業でもある。そして、それを見出せば、その方向へとわずかながらでも歩を進めることができ、その先にある将来へ向けての準備や努力へとつなげていくことができる。

そしてまた、御船が‘思考の連続’といったように、生活や家族、自分の想いも日々変わるものであるように、生活設計は、その点検・方向転換・検証を必要とし続けるものでもある。実現できるのか、したいのか。可能なのか、何が足りないのか。これでいいのか etc。

将来の課題が、より多大な準備や努力が必要であればあるほど、それらを実現するためには、このような姿勢や状況に応じた検証の重要性は増していく。

## Ⅱ. 社会環境の変化と生活設計の考え方の変遷

一方生活は、その時々々の社会環境に大きく左右される。農家が多い時代、サラリーマンが多い時代、社会保障が未整備な時代、整っている時代、経済成長が続いている時代、そうでない時代など。その時代時代に応じて、生活リスクや生活資源、描ける夢、生活課題が変わってくる。

生活設計の考え方が芽生えた当初は、農家の多い時代である。農家が収入を得る時は一年のうち一定の時期に集中していた。その年々の収入は天候などにも左右される。一年間を通して収入と支出のバランスをとることは重要な課題であった。長期的なスパンで家計を管理するという。それは単なるお金の計算ではなく、生活を把握し組み立てていくことである、という意味を「生活設計」という言葉に込めたのではないだろうか。

そして都市化、サラリーマン化のなかで今井光映によって生活設計の視点がさらに長期化し、その考え方が洗練されてきた’70年代。’70年代は、婚姻率が高く離婚率が低いという、ほとんどの人が結婚していた時代である。また出生率も低下して、だいたい2～3歳差の2人の子どもをもつようになっていった。しかも就職、結婚、子供をもつ時期も似

通っていて、転職が少ないなど働き方や家族の持ち方などのライフコースの歩み方も比較的似ていた。

したがって、多くの人が、同じような時期に辿る生活課題、そのうち特に多額の支出が必要となるイベントとして、結婚、おおむね2人の子どもの出産と教育。出身地と異なる地域で働いている人が多かったこともあり、社宅や借家を出て自分の住宅を取得する等々という事柄を抽出し、それらを実現するための長期的な支出管理や負債管理等の資金管理を行うことが生活設計のメインであったといっても過言ではないだろう。一言でいうなら、多くの家族が生活の課題とした事柄の実現のための、家族主体の経済的生活設計であった。

その際、経済成長や終身雇用、年功序列賃金を背景として、収入が安定的に上昇すること、また土地神話などにより購入した持ち家が安定した資産となることを暗黙の前提としてきた。将来収入を予測し、多くの人にとって人生最大の買い物であり資産形成でもある「住宅取得」のためにどのくらいの負債を負うことが可能か、月々の返済がどのくらいで、いつ頃に返済し終わるのか、教育費の支出がかさむ時期と重ならないように、あるいは重なる時期にどのように備えるか、を考えることは生活設計の最重要課題であったといえる。この考え方の広がりや高学歴化とともに持ち家率が上昇していった一因となっていたのかもしれない。

一方、サラリーマンにとって安定的な収入を脅かすリスクは、主に働き手の死亡であり、世帯主の死亡保障がどのくらい必要かを考える手段としても保険会社を中心として広まっていった。このような中で就労は、就職し、どう働くか等の生活課題としての側面より、そこから得られる収入という経済的側面が扱われていたように思う。

しかし'80年代は、未婚率の高まりや、晩婚化、晩産化などこれまで多くの人が歩んできた結婚、出産等の人生のイベントが選択肢化し、その時期が多様化してくる。また、転職者の増加など働く場所や働き方の選択も多様化してきた。生命保険文化センターが行った「生活価値観調査」をみても、個の意識が強くなる時代である。<sup>(1)</sup>生活設計にも、'個人'の生活設計として、個人の「夢や目標」の大切さが前面に出てくる。しかし、なかなか多額の支出を要する出来事の資金管理をメインとした枠組みに、個人の夢や希望、ライフコースの選択を反映させることは難しく、人々の多様性をどのように生活設計の考え方に反映させたらよいかを模索していた時期でもあったといえる。

一方、女性の平均寿命が80歳を超え、'人生80年時代の生活設計'として老後準備の必要性が提唱されたのもこの時期である。長寿化や核家族化によって人々の退職後としての「老後」への関心が高まってきた。老後に子供の負担になりたくないとの意識の高まりや独身の増加等の家族の形態・意識の変化も、老後の経済的準備への関心の高まりの一因であった。生活設計は、個人の生活の多様性を考えるというより、従来の生活課題に加えて老後準備を考える手段としてその機能を発揮した。

そして、'90年代。それまでの生活課題がなくなったわけではないものの、雇用の流動

化により高まってきた収入リスク、株価の下落や金融機関の破たん等により意識されたストックリスク。これらにより、収入やストックが右肩あがりに上昇することを前提とした時代から、収入やストックの不安定性への対処を意識する時代へと転換した。そこで、様々なリスクへの対応を考えていくためのリスクマネジメントの必要性を提唱したのである（藤田）。

そのなかで、サラリーマンにとって大きなリスクになりつつある収入リスクに着目し、働くということ、収入面のみでなく、稼得能力や家計の収入の複源化としての共働きなど働き方を含めて、リスクに対応できる生活資源のひとつとして意識していく必要性を指摘した。<sup>(2)</sup>

同時に、生活設計の領域を、①夢や目標を描くライフデザイン領域、②お金や家族や友人、情報などの生活資源を形成したりポートフォリオを考えていく生活資源マネジメント領域、そして③ライフデザインや生活資源に対してダメージをもたらすようなリスクを意識し、対処を考えていくリスクマネジメント領域という、3つのマネジメント領域に分類した。そしてそれらの領域は、常に連動している必要はなく、夢や目標を探りたいとき、経済的なプランを立てたいとき、リスクに備えたいときなど、その時々を考える領域を意識することで、多様な状況下にある人々の、多様な生活設計につながるのではないかと考えたのだ。

そして2000年代。収入の不安定性が一層増し、非正規雇用者の増加、失業率の増加、新卒の就職難、平均年収の低下など収入リスクが高まった。以前は、生活課題として挙げられることのなかった就職も、今や大きな生活課題となっている。必然的に、学生など若年層が自分の生活を描く機会の重要性が高まっているといえる。

将来収入が不安定さを増すと、どうしても将来の不確実性の高まり、将来不安の高まりへと意識が向きがちである。しかし、日々の生活や将来の目標・夢がおざなりになってしまえば、本末転倒になってしまう。ウルリッヒ・ベックが指摘したように、現在は様々なリスクに囲まれたリスク社会であることを踏まえれば、それらのリスクへの対処方法を標準化し、リスクは単なる不安から対処可能なリスクへと位置付けること。また、個人で対処可能な部分、家族で対処可能な部分、社会全体でサポートすべき部分の共通認識も必要であろう。その上で、改めて、将来を見据える思考のツールとしての生活設計の考え方や枠組みを提示することが重要な時期であると考ええる。

### Ⅲ. リスク社会における家計の収入リスクとその対処：調査からのまとめ

#### 1. ‘意図せざる’収入リスクの高まりと、収入の安定性に寄与する要因

そこで、1996年に首都圏で行った、家計がどのような収入リスク・支出リスクを経験し、それが家計にどのような影響をもたらし、どのような対処をしているのか、その他生

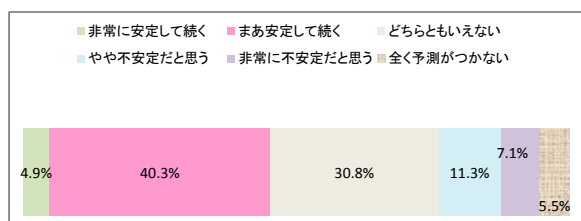
活課題への意識や準備などについてアンケートを行った調査<sup>3)</sup>をもとにして手を加えた調査を、同じく首都圏で行った（実査は2012年、1,500サンプル）。

結果をみると、1996年当時と比べて、2012年では、会社都合の失業や会社の業績不振による減給などの、‘意図せざる’収入の途絶や大幅低下などのリスクに直面した家計が増えていることがうかがえた（一方で、働き手の病気やけがによる収入リスクの経験者は依然として存在し、その影響は大きい）。

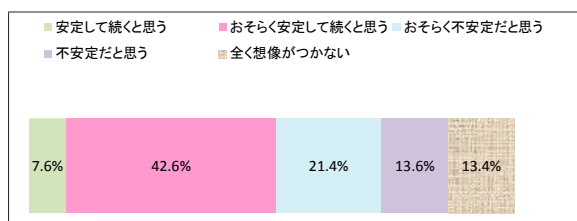
そして、改めて考えさせられたのは、自己都合や会社都合を合わせると家計が経験する収入リスクの回数は平均で1.6回と複数回であることである。雇用の流動化のなかで家計にとってはもはや、特異なリスクではなくなりつつあるようだ。そして、そのことと関連しているのか、1996年調査と2012年調査いずれも、収入の安定性の予測では、将来も主な収入源が安定して続くと予測した割合はほぼ5割とあまり変わっていないのだが、その理由に違いがみられた。1996年調査では、収入の安定性は、働き手の資格や専門性、キャリアなどによって保たれる、すなわちそれらによって収入の不安定性のリスクを回避することができると考えられている割合が高かった。一方、2012年調査では、収入の安定性にはそれらの要素より、会社の業績や規模、正社員としての身分などが重要と考えられている様子がみられたのだ【図表1-1、1-2、2-1、2-2】。

もっとも、1996年調査には、2012年調査で収入が安定して続くと考える理由の選択肢に、‘働き手の健康’や‘会社の規模’、‘雇用期間に定めがない身分’などの項目を用意していなかった。そのために、これらを単純に比較することはできない。しかしながら、あてはまるものをいくつでも選択してもらった複数回答をみても、2012年調査では、働き手の資格や専門性、キャリアを収入が安定して続く理由として選んだ割合が低いことをみると、収入の安定性は自分でコントロールできない要因が大きいと意識している割合が高くなっているといえるのではないだろうか。つまり、収入リスクは、個人のコントロールを超えたもの、ひいては、多くの人にとって無関係ではないリスクとして意識されるようになってきているといえるだろう。

【図表1-1 主な収入源の今後の安定性予測（1996年調査）】



【図表1-2 主な収入源の今後の安定性予測（2012年調査）】



【図表2-1 主な収入源が今後安定して続くと思う理由 (1996年調査)】

(図表1-1 で主な収入減が安定して続くと思した人の回答)

		(複数回答)	主な理由1	主な理由2
働き手本人の要件	本人に豊富なキャリアや業績があるから	44.7%	20.3%	16.7%
	本人の技能や専門知識が優れているから	37.0%	19.5%	11.8%
	働く本人が資格を持っているから	33.9%	25.7%	1.1%
	本人がいろいろな情報に気が配っているから	19.5%	3.5%	5.7%
	本人の学歴が比較的高いから	12.0%	1.9%	2.6%
人間関係・家族	世の中の変化で本人の能力が認められる	4.1%	0.0%	1.4%
	会社内の人間関係がよいから	26.0%	5.7%	11.2%
	社外の人間関係を広げているから	15.4%	1.1%	5.7%
	家族が本人の仕事に協力しているから	20.0%	2.4%	6.3%
	頼れる友人や知人がいるから	11.8%	1.4%	2.3%
勤務先・社会情勢	勤め先の業績や店の売上が好調だから	35.8%	14.6%	15.2%
	年功序列制度がまだまだ続くから	15.1%	2.2%	10.6%
	だんだん能力給制が導入されるから	8.4%	0.8%	4.9%
	よい景気が続くと思うから	5.0%	0.3%	3.2%
	金利が安定しているから	2.6%	0.8%	1.1%
計		100%	100%	100%
N=416				

【図表2-2 主な収入源が今後安定して続くと思う理由 (2012年調査)】

(図表1-2 で主な収入源が安定して続くと思した人の回答)

		(複数回答)	主な理由1	主な理由2
働き手本人の要件	豊富なキャリアや業績があるから	14.8%	3.6%	5.1%
	資格を持っているから	17.2%	4.5%	6.2%
	学歴が高いから	2.6%	0.1%	0.3%
	役職についているから	11.9%	4.1%	3.1%
	仕事を辞めるつもりはないから	63.4%	11.0%	36.6%
	健康だから	44.5%	16.8%	10.5%
	勤続年数が長いから	18.6%	5.9%	4.5%
人間関係・家族	職場内の人間関係がよいから	16.3%	3.0%	4.5%
	仕事外の人間関係・ネットワークを広げているから	4.5%	0.3%	1.0%
	家族が本人の仕事に協力しているから	9.1%	0.7%	2.6%
	家族が健康だから	12.9%	1.4%	2.4%
勤務先・社会情勢	勤め先や自営の業績の好調が期待できるから	13.6%	2.8%	5.5%
	企業規模が大きいため	33.9%	23.2%	4.9%
	雇用期間に定めがないから	28.3%	18.6%	1.7%
	よい景気が続くと思うから	0.6%	-	0.1%
計		100%	100%	100%
N=858				

【図表3-1 主な収入源が今後不安定になると思う理由 (1996年調査)】

(図表1-1 で主な収入減が今後不安定になると予想した人の回答)

		(複数回答)	主な理由1	主な理由2
働き手本人の要件	本人に豊富なキャリアや業績が十分でないから	13.3%	5.9%	2.2%
	特に優れた技能や専門知識を持っていないから	22.9%	7.8%	5.8%
	働く本人が資格を持っていないから	16.3%	10.5%	0.0%
	身の回りの情報にあまり気を配っていないから	5.4%	2.0%	2.9%
	本人の学歴があまり高くないから	6.6%	2.6%	0.7%
人間関係・家族	世の中の変化で本人の能力が活かせなくなるから	27.1%	2.0%	18.1%
	会社内の人間関係がよいから	7.8%	1.3%	1.4%
	社外の人間関係が少ないから	4.8%	0.7%	0.7%
	家族の協力が得られないから	7.2%	1.3%	0.7%
	頼れる友人や知人がいないから	4.8%	0.0%	2.9%
勤務先・社会情勢	勤め先の業績や店の売上が不安定だから	54.2%	40.5%	6.5%
	年功序列制度がまだまだ続くから	4.8%	2.0%	2.2%
	だんだん能力給制が導入されるから	4.2%	1.3%	0.7%
	景気が悪くなると思うから	69.3%	15.7%	48.6%
	金利の変動が大きいため	18.1%	6.5%	6.5%
計		100%	100%	100%
N=416				

【図表3-2 主な収入源が今後不安定になると思う理由 (2012年調査)】

(図表1-2 で主な収入減が今後不安定になると予想した人の回答)

		(複数回答)	主な理由1	主な理由2
働き手本人の要件	本人のキャリアや業績が十分ではないから	9.2%	2.7%	2.0%
	資格を持っていないから	8.9%	2.5%	1.2%
	学歴が高くないから	7.2%	1.3%	1.7%
	役職についていないから	7.7%	1.0%	2.2%
	自発的に仕事を变えたいから	12.4%	3.3%	7.4%
	病気がちだから・持病があるから	9.2%	4.5%	2.2%
	勤続年数が短いから	8.7%	2.5%	3.5%
人間関係・家族	職場内の人間関係がよくないから	6.9%	1.8%	3.0%
	仕事外の人間関係・ネットワークの広がりが期待できないから	4.3%	0.7%	0.5%
	家族の協力が得られないから	2.2%	0.3%	0.5%
	介護・看護が必要な家族がいるから	1.3%	0.3%	0.7%
勤務先・社会情勢	勤め先や自営の業績の好調が期待できないから	48.0%	30.1%	11.5%
	企業規模が大きくないから	28.8%	14.0%	5.0%
	雇用期間に定めがあるから	23.9%	20.7%	0.3%
	景気が悪くなる・悪いと思うから	61.0%	10.0%	41.0%
計		100%	100%	100%
N=858				

## 2. 収入リスクの影響とダメージからの回復

重川（第4章）、藤田（第5章）の論文にもあるように、リスクの経験者のサンプルが多く抽出できた2012年調査から、実際に収入の途絶や大幅低下という収入リスクに直面した家計の、その要因となった出来事をみると、①自己都合退職、②会社都合の失業、③事業の失敗・不振、④会社の業績不振による減給、⑤働き手の病気・けが、⑥転職・独立が多くの家計が経験する収入リスクである。影響や対処をみていくと、リスク要因によって差はあるものの、いずれも社会保険料や税金、家賃や子供の教育費などの支払やローンの返済が困難になるなどの他にも、多重債務を負ったり、人間関係に問題が生じたり、体調を崩したりとの影響を受けているケースもあること。当面は、家族の収入や貯蓄の取り崩し、積立のある保険の解約、あるいは親族からの支援や予定外の借入などによって、また病気やけが、失業などの場合には、(恐らく雇用保険や傷病手当などの) 公的支援をも利用して当面の生活費をまかなっていること。そして、そのダメージからは、家族や友人に相談し、わずかにみられたケースでは専門機関に相談し、親と同居を始めたり、金融機関と交渉を行ったり、時には自己破産をするケースもややみられたが、家族の収入やそれ

以上に本人の収入を中心として回復をはかっている、という様子がうかがえた。

また、いざという時には、お金や保険のみならず、支援してくれる家族や友人の存在、相談できる相手の存在、それとともに、情報力や交渉力なども重要な資源であることがうかがえる。ダメージからの回復には、公的支援や、それを受ける際の専門機関との相談も大きな力となっているようだ。

### 3. 収入リスクのダメージからの回復を妨げるものと、必要な回復要素

また、収入リスクに直面した場合、そのダメージからの回復は、多くの場合、収入が元通りまではもどらなくても、生活水準を見直してそのなかで収入と支出のバランスをとって生活を立て直して対処しているようだ。

しかし、重川（第4章）が分析で示したように、ダメージからの回復がなかなかできない家計は、回復をとげている家計に比べて、収入リスクに直面したときに行った「借入」の影響が大きいようだ。負債の金額とともに、どこからどの程度の利率の借入を行うのか、そして収入の回復ばかりでなく、その負債を返済していくための家計の見直しやそれへの助言、計画などきめ細かな対応も重要となってくるケースもあるのではないだろうか。‘意図せざる’収入リスクに直面する家計、それも、雇用保険や傷病手当など公的支援制度が利用できないケースにも、どのようなサポートができるのかを考える時期にいるのではないだろうか。

そして、収入リスク、支出リスクいずれにおいてもそれらに直面した場合には貯蓄の取り崩しや保険の解約を行って対処している割合が高い。一方、貯蓄は生活課題のためや、いざという時のための備えとして、そして保険はまさに‘いざという時’のための保障である。したがって、リスクに直面してこれらを取り崩している状態は、一方でそのダメージからの回復を図ってはいるものの、生活課題への影響や他の‘いざという時’、すなわちリスクに備えるという生活保障資源が減少している状態といえる。

生活保障への影響は、収入リスクを経験した家計や、収入リスクへの対処で借入、貯蓄の取り崩し、保険の解約を行った家計では、医療保障や老後保障について「経済的余裕がない」と回答している割合が高いことからもうかがえる。

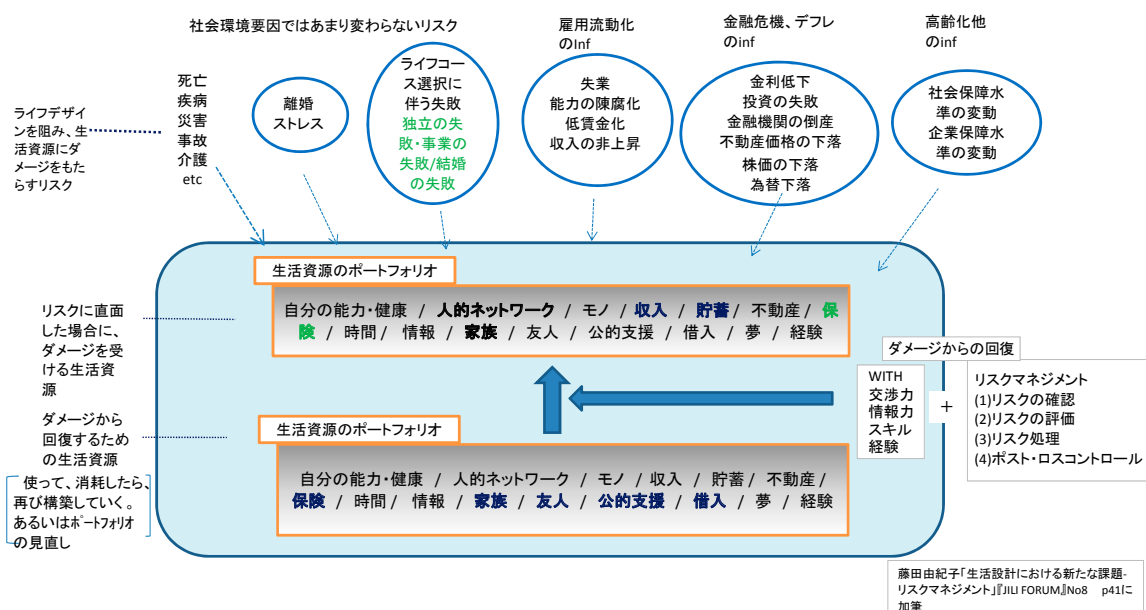
リスクに直面した後の回復は、①生活課題への影響を最小に抑えながら当面の生活の回復に努める、ということに次いで、②生活保障資源を見直し、修復し、立て直すこと、と二段階で行う必要があるだろう。そうでなくては、リスクを複数回経験する、まさにリスク社会において次に某かのリスクに直面した場合にはダメージからの回復が難しくなってしまう。

①の「生活課題への影響を最小に抑えながら当面の生活の回復に努める」ためには、自分や家族の収入や貯蓄、保険の確保だけでなく、公的支援、そして公的支援に対する知識や情報、相談にのってくれる家族親族や友人知人、専門機関、そしてどこにどのような情報があり、どのような支援があるのかといったような様々な情報、負債の返済が困難に

なったときなどの金融機関等との交渉力など様々な資源や能力が重要な働きをする。これらのうち、経済的資源以外のものは、使って減っていくものではない。むしろ、知識や相談、交渉力、情報などは使うほどに磨かれていくものであり、次のリスク直面時にも役立つであろうし、リスクに直面する友人に助言を与えることもできるかもしれない。その意味では、リスクの経験は、マイナス面のみではないのではなかろうか。

そして②「生活保障資源を立て直す」ためには、どの程度の生活保障資源にするのか、という貯蓄や保険の回復の水準や、手段の見直しも必要であろう。以前と同じもので、同じ水準を確保する必要はないのである。

【図表4 リスクの分類と生活資源】



## IV. 今後の生活設計の考え方に向けて

### 1. リスクマネジメントへの視座

リスクには様々なものがある。社会環境の変化によって影響を受けない、病気やけが、介護や死亡、事故、災害などのリスク、雇用流動化によって高まっている収入リスク、デフレや金融危機などの環境下では資産リスクが高まり、ライフコースの多様化が進んだ社会では、転職や独立などのライフコース選択の失敗や離婚という選択的リスクも高まる。しかし‘選択的’リスクでは、その事象を選択する場合にある程度の準備を行い、あるいは覚悟をしている場合も少なくない。対して‘非選択的リスク’、すなわち、病気や事故、会社都合の失業や会社の業績不振による減給などのリスクの場合は、その準備の有無や手段、程度などにはかなり差がある【図表4】。



これらのリスクのうち、雇用流動化のなかで高まっている収入リスクへの対処を、①リスクの確認、②リスクの評価、③リスク処理：リスクコントロール / リスクファイナンス ④ポスト・ロスコントロール、という一連のリスクマネジメントのプロセスで考えると、収入途絶や収入の大幅減少という収入リスクは、①リスクの確認：雇用の流動化のなかでそれを意識せざるをえない社会環境にあり、②リスクの評価：収入の途絶や大幅低下は、家計に経済的な影響の他、人間関係や体調などにも影響を与える。したがって、③リスクコントロールの対象リスクであり、‘意図せざる収入リスク’に直面しないように、直面したときのダメージを小さくするために、自分の稼得能力を高めたり、収入源の複源化をはかったり、健康に気をつけハザードを抑制する。そして、貯蓄や保険に加入する等リスクファイナンスを行う、ということになる。

そして、家計のリスクマネジメントが企業のリスクマネジメントと最も異なるのは、家計は自己破産をしても離婚をするなどして家族が離れても、生活が続いていくという点であり、あるいは年齢とともに病気の確率が高まることなどを考えても、様々なリスクはむしろ避けられないものでもある、ということである。したがって④ポスト・ロスコントロールが極めて重要となる。

リスクに直面した場合には、前述したように①生活課題への影響を最小に抑えながら当面の生活の回復に努め、さらに、②生活保障資源を立て直す、という二段階で回復を図る必要がある。そのため、ポスト・ロスコントロールで役立つ資源、自分や家族の収入や相談にのってくれる家族親族や友人知人、そしてどこにどのような専門機関や公的支援があるのかなどの情報、負債の返済が困難になったときなどの金融機関等との交渉力などを身につけておくことも大切だろう。ダメージからは家族のもつ能力や資源を総動員して回復を図っていくのである。そして、そのなかで、公的支援は極めて重要性の高いものである。私的な生活保障資源だけでは回復が困難な場合も少なくなく、公的支援やそれに近いサポートもリスク社会のなかでは整えていく必要があるのではないだろうか。

## 2. 生活設計の3つの領域とそのバランス

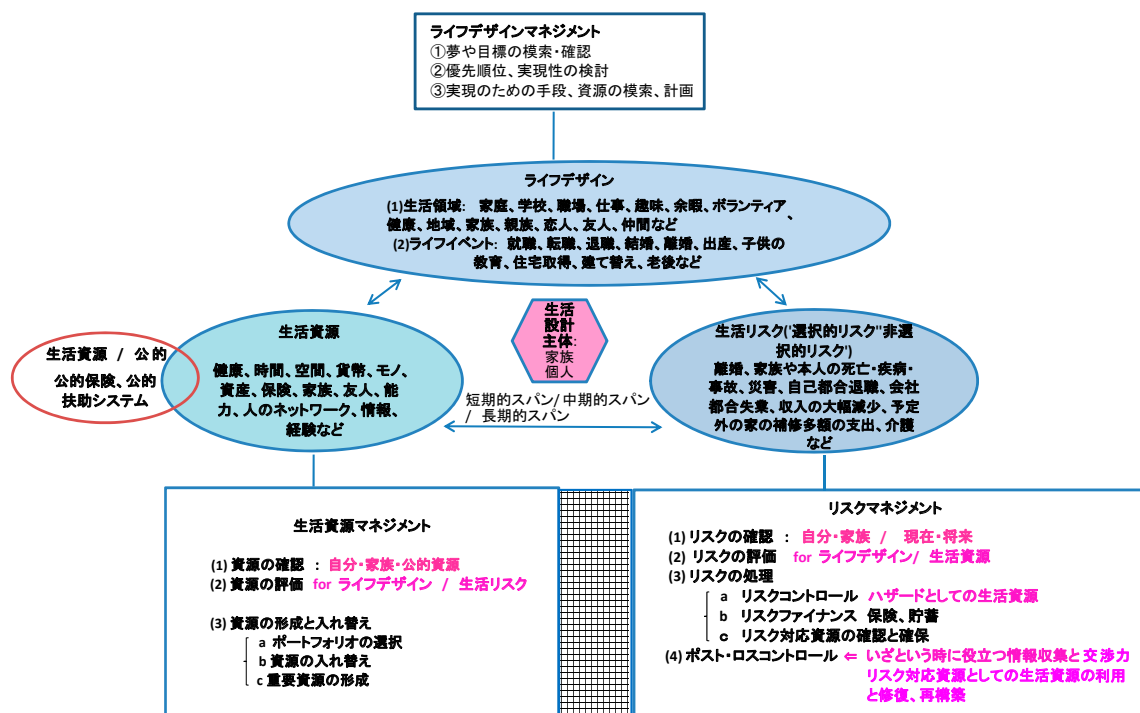
ところで、前述した一連のリスクマネジメントは、昨今のリスク社会において重要な事柄であることは間違いないのであるが、これが生活設計の中心ではない。むしろリスク社会であるからこそ、リスクマネジメントはひとつの領域に過ぎず、それを踏まえて、改めて生活設計の他の領域、すなわち、ライフデザインマネジメント、生活資源マネジメントとのバランスをとっていくことが重要であろう。

むしろこれまで夢や目標を模索し、設定し、それらを実現していくための方策を考えるライフデザインマネジメントは、生活資源マネジメント、リスクマネジメントの上位概念という位置づけにあるとあってよいだろう【図表5】。

そして、調査からみてきたように、リスクへの対処として有効な生活資源であったもののうち、貯蓄、家族や友人、情報や交渉力などはリスクに特化した資源というより、むしろ

ろライフデザインを彩る資源であろう。家族や個人のもつ生活資源を、‘夢や目標’のために、あるいは‘いざ’というときに備えてどう確保し、同時に、‘いざ’というそれらをいかに総動員して有効活用できるのかというマネジメント力は、生活設計の重要な能力のひとつといえるのではないだろうか。

【図表5 生活設計の3つの領域概念図】



藤田由紀子「リスクと生活設計」『現代社会の生活経営』、P56に加筆

### 3. 生活設計の基本的な考え方の整理

最後にこれまでの生活設計の基本的な考え方の要素を示した【図表6】。大きくわけて(1)主体、(2)時間軸、(3)生活設計領域に分類した。

(1) 主体に関しては、まず①単位を家族主体にするのかを考える必要がある。個人を主体にするのか家族を主体にするのかによって、夢や目標、リスクが異なってくるし、マネジメントも異なってくる。そして、生活設計に必要な要素としてこれまで指摘されてきた②能動性。他者と相談することがあっても、最終的には自分でどう生活を組み立てていきたいのか、あるいは組み立てていくのかという意味がなければ、将来の生活を描くことはできない。

加えて③生活設計が生活技術であるからには、その技術や能力も必要な要素であろう。例えば、それは、将来を見通し、夢や目標を模索し、設定する力であり、その実現のために生活資源を確保し、マネジメントしていく力であり、あるいはリスクに対処していく力であり、いざというときに生活を見直し、立ち直っていく力である。そして大切なこと

は、これは鍛えていくことができる力である点である。

次に（２）時間軸。生活設計は、現在を見据えて将来を見通すものであるが、同時にそれは過去をみつめて見えてくることもある。その意味で、時間軸は、過去-現在-未来となる。

そして、生活設計を考えるタイムスパンとしては、短期・中期・長期のスパンがある。乗本が第３章で述べているように、目標や夢は短期的なもの、中期的なもの、長期的なものがあるという。リスクに関しても同様であろう。

（３）そして、３つの生活設計領域。これに関しては２．で述べたとおりである。

生活設計は、【図表６】に示したような要素をもちながら、将来への希望を見出すための方法のひとつでもある。リスク社会であるからこそ、多様なリスクに取り巻かれてはいるものの、リスクマネジメントを行うことにより、リスクをむやみな不安から、乗り越えていく課題へと置き換え、リスクに対する耐性を身に付けていく。そして、何よりも、その時々状況のなかで、自分や家族の生活のこだわりをみつめて、ライフデザインを描いていくことを大切に生活設計を提唱したい。

【図表６ 生活設計の基本的な考え方】

H26.2（藤田由紀子）

(1)主体	単位	個人・家族：個人の目標・課題、家族の目標・課題 主体によって、個人の生活設計、家族の生活設計 ただし、実際に生活設計を行うのは個人。個人が、家族の課題をどこまで組み込むか (特に、経済設計の場合)
	能動性	無自覚な将来準備は生活設計ではない（御船美智子「生活設計の複合性と相対化」『JILI FORUM』No8 p15） 判断し、決めるという意味決定性がある（今井光映『新・生活設計-生き方のデザイン』日本放送出版協会）
	技術・能力	生活設計を行う技術 (例) 生活を見通し、目標や夢に向かって生活資源を確保する力、リスクに対処する力、生活を見直したり、立て直す力
(2)時間軸	過去-現在-将来	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 現在の生活を把握する。そのことが、将来を描いたり、将来の目標・課題を設定し、実現する場合の基礎にもなる</li> <li>● 現在の自分のポジションを確認するために、過去を振り返ることもある。将来を描く場合にも、現在の自分のポジションを確認することもある</li> </ul> その意味で、時間軸は、過去-現在-将来が、それぞれつながっている（相互作用）
	短期・中期・長期	短期的な目標や課題 中期的な目標や課題 長期的な目標や課題           } これらのバランスをとっていく
(3)生活設計領域	ライフデザイン ・ライフデザインマネジメント	夢や目標を模索する、描く ライフイベントを設定する (就職、転職、独立、結婚、出産、子供の教育、住宅取得、老後 etc.)
	生活資源・生活資源マネジメント	経済的資源 (現金、預貯金、土地、家屋、有価証券、保険、etc.) 非経済的資源 (ヒト<家族、親族、友人、知人、近隣、仕事のネットワーク他>、能力<稼得能力、家事能力、交渉能力他>、時間、健康、モノ、情報 etc.) 公的保障資源 (社会保険、社会扶助他)
	生活リスク・リスクマネジメント	純粹リスク (死亡、疾病、けが、事故、火災、震災等の災害、盗難、介護、失業 etc.) 選択的リスク (ライフイベントの選択に伴うリスク離婚、独立・転職の失敗) リスクの確認-リスクの評価-リスクの処理 (リスクコントロール/リスクファイナンス) —ポスト・ロスコントロール

ただし、その思考のプロセスには、「訓練」が必要なのではないだろうか。教育の場で、あるいは生活設計ツールのなかで、その「能力」を高めるしくみの構築も課題のひとつであろう。

以上

#### 【参考文献】

- ・ 今井光映「生活設計の基礎概念」『生活設計論』 ミネルヴァ書房、1971
- ・ 御船美智子「生活設計の複合性と相対化—生活主体形成への展開—」『JILI FORUM』 No.8,1998
- ・ 乗本秀樹『システムと姿勢のライフ論<新生活設計学 I >』 同文館、1999
- ・ ウルリッヒ・ベック著『危険社会』 法政大学出版局、2011
- ・ (財)生命保険文化センター編『新・生活設計—生き方のデザイン』 日本放送出版会、1987
- ・ (財)生命保険文化センター編『長寿時代の生活設計』 1991
- ・ 藤田由紀子「生活設計の新展開」『JILI FORUM』 No.5,1995
- ・ 藤田由紀子「生活設計・再考」『JILI FORUM』 No.7,1997
- ・ 藤田由紀子「多選択肢時代の生活設計を考える—リスクとチャンスのマネジメントの視点から—」『JILI FORUM』 No.8,1998
- ・ 藤田由紀子「リスクと生活設計」御船美智子・上村協子編著『現代社会の生活経営』 光生館、2001

注(1) (財)生命保険文化センター編『自己主義の時代』 東洋経済新報社、1988

(2) 藤田由紀子「生活設計・再考」『JILI FORUM』 No.7,1997

(3) 「生活設計に関する調査」実施期間:1996年7月～8月、調査対象:首都圏40km圏の18歳～69歳の男女個人、調査方法:郵送。調査概要は『JILI FORUM』 No.7,1997に掲載